月曜日掲載

部活の地域移行効果

キャッチアップ ふくしま

喜多方で実証試験

公立中学校の部活動で、地域の人材や環境を活用する「部活動の地域移行」が新年度から段階的に始まる。喜多方市では、住民が文化部系の地域移行に向けて教育プログラムの開発や実証試験を行っている。強制ではなく、参加したくなる部活動へ―。地域移行で見えてくる部活動の姿と課題を探る。（喜多方支社・斎藤優樹）

視野広がり生徒成長

喜多方市で文化部系の地域移行を主にまとめているのが、市地域おこし協力隊として市教委文化課に勤務する石田俊輔さん(54)。学芸員や教師の資格を有しており、地域移行で言うところの「地域の人材」に当たる。石田さんは「文化活動は手芸や製作だけでない。地域にある面白いことを体験して感じることもそうだ」と説明する。

石田さんは本年度、親交のあった芸術家らと任意団体「学びファシリテーション」を設立。文化部系の地域移行を担う教育プログラムの作成を進め、喜多方一中文芸部で実践した。教育プログラムのテーマは「多彩な芸術に触れ、自分の内面を知る」。石田さんは「地域の人材や文化に触れることで、生徒の郷土愛を深め、自身を見つめ直す場にしたかった。多様化する時代の中、自分の考えを持つことがこれまで以上に重要になっている」とする。

石田さんは昨年6～12月に同校文芸部で教育プログラムを20回以上実践し、地元の写真家や漆職人、画家ら計7人を講師に招いた。同校によると、文芸部の活動はこれまで校内でイラストを描いたり、集まって話をすることが中心だった。顧問の金沢文利教諭(60)は「多様な文化や芸術に触れることで、主体的に取り組んだり、自分の考えを話す生徒が増えてきた」と子どもたちの成長に目を細める。

喜多方一中で実践された部活動の地域移行に向けた教育プログラム

活動費の捻出課題

地域移行では、人材の登用方法や活動費の捻出などが課題として浮かぶ。人材登用で石田さんは講師との面談で心構えを聞くだけでなく、子どもたちの成長にどのようにつながるかを明確にすることが重要だと強調する。活動費については、文化庁の創設支援事業があるものの、継続して支援を受けることは難しく、「学校や保護者から支援がないと地域で部活動を運営することは厳しい」と話す。

一方で学校や保護者から支援を受けた場合、活動内容と成果、活動費の使い方などで「厳しい目」が向けられる可能性がある。石田さんは「生徒が活動の前後を比較して自己評価するなど、成果を『見える化』することが大事だ」とする。

同校文芸部の津田帆香さん(2年)は「地域の文化を地域の人から学ぶことができる貴重な機会だった」と振り返る。地域移行では、地域の優秀な人材と触れ合うことで生徒の視野も広がる。地域や学校など関係する人たちが地域移行のあるべき姿について協議を重ね、実情に即した教育プログラムを作成・実践していくことが必要になる。